
彼岸花の花言葉

phantom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸花の花言葉

【Nコード】

N4152X

【作者名】

phantom

【あらすじ】

突然の事故で最愛の人を失った主人公梓。最愛に人を思つて泣く毎日。そんな中で彼女は彼岸花の花言葉について知る。

第1章 突然の悲劇

第1章 突然の悲劇

私の愛しい人はもうこの世にはいない。

私の愛しい人は交通事故で亡くなってしまった。

こんなに人を愛しいなんて思ったことはなかった。こんな気持ちは生まれて初めてだったと思う。

あの日、私達は2人で1泊2日で京都に行く予定だった。私達は車の中でどこに行こうか相談したり、他愛ない話をしたりして盛り上がっていた。

ここまでは普通の幸せなデートと変わりなかった。それでも悲劇は私達を容赦なく襲った。

高速道路を走っている時だった。すると、私達が乗っている車に向かって来る車がいた。

逆送してきた車も私達の車もスピードを出していて、避ける暇もなく2つの車は衝突した。

私はその後どうなったのかも知らない。気が付いた時には病室にいた。

目の前には家族や友達の顔。皆、安堵を浮かべた表情をしていた。でもいくら探しても最愛の人の顔が無かった。

「ねえ、隼人は？まだ起きてないの？」

するとみな顔が曇り、母がこう言った。

「梓、聞いて。隼人君ね、亡くなったの。」

私は何を言われているのかわからなかった。

「でも私生きてるよ？隼人と一緒にいたけど生きてるよ？隼人が死ぬはずない。嘘言わないで・・・。」

「あのね、梓。隼人君はあなたを庇って亡くなったの。あなたにずっと抱き着いていたって。」

その後私は母に連れられ隼人の所へ行った。隼人の顔には白い布、頭の上には線香があつた。

隼人の死に顔は笑つてた。血まみれなのに笑つてた。まるでもう悔いは無いという感じで。

私は隼人の手を握った。冷たかつた。その時初めて隼人が死んだ事を実感した。

隼人の葬儀が終わり、どのくらい泣いたことが。もう一生涙は出ないだろうと思うくらい泣いた。

もう隼人には会えない……。話す事も一緒に笑い合う事もできない。

なんで私は隼人と一緒に死ななかつたのかな。死んでたらずっと一緒にいれたのに……。

神様なんで私をこんなに苦しめるの……

その時だった。私が彼岸花の花言葉を知つたのは……

第1章 突然の悲劇（後書き）

最後まで見てくださってありがとうございます。

駄文のくせに短くてすみませんでした。

これは連載なのでまた書きます。

駄文ですが、温かい心で見ていただけたら幸いです。

第2章 彼岸花

隼人がいない世界。こんなに楽しくない世界ってあるんだね。生きてるって実感が湧かない。私の視界はまるで白黒写真のよう。隼人一目でもいいから逢いたい――

私はいつものように会社の屋上にいた。隼人が死んでから昼休みはいつも屋上にいた。

屋上は空に近くて、隼人に少しでも近づけると思ったから。

隼人の事考えながら屋上のベンチでお昼を食べていると、頬に冷たさを感じた。

「冷たっ。あれ？凌平。なんでここに？」

「やつぱりここにいた。はい、これ。」

さっきの頬の冷たさの正体は缶ジュースだった。しかも私が大好きなオレンジジュース。

「あっ、ありがとう。ごめんね、凌平。」

凌平は私の幼馴染で小さい時からずっと一緒にいる。幼稚園も小学校も中学校も高校も就職先も一緒だった。これも運命なのかなって思っている。

「中で食べればいいのに。こんな屋上じゃなくて。」

「屋上が一番空に近い場所だから。ここならちよつとでも隼人に近づける。」

「まだ死んだ彼氏の事、気にしてるの？」

「隼人の事が忘れられない。一目でもいいから逢いたい。」

「そういえば、もうすぐ彼岸だね。」

もうこんな季節か……。隼人が死んで1年。早いなもうこんなに時間が経ったんだ……。

凌平がこんな事を言ってきた。

「彼岸花の花言葉知ってる？」

「彼岸花の花言葉・・・？知らない。」

「情熱、悲しい思い出、独立、あきらめつつあるけどもう一つ意味があるんだ。」

「？何。」

「再会」

その言葉を聞いた時胸が熱くなった。私はやっぱり心の底から隼人に逢いたいんだ。

彼岸の日、私は隼人の墓へ行き彼岸花を供えた。また逢えるように願いながら・・・

また隼人に逢いたいというのは私の我儘だろうか。
それでも私は隼人に逢いたい・・・

第2章 彼岸花（後書き）

最後まで見ていただきありがとうございます。
駄文で短くてすみません・・

第3章 夢

私が隼人の墓に彼岸花を供えたその日、こんな夢を見た。

一面に広がる彼岸花――

「・・・さ」何か聞き覚えのある声がある。

「・・・ずさ」「梓」その声は私を呼んでいた。

振り返ってみると紛れもなく隼人だった。私を安心させる優しい声・・・。

「隼人、来てくれたんだね・・・」

と言って、私は隼人に駆け寄り抱き着いた。隼人はそんな私を抱きしめてくれた。

「やっと隼人に逢えた。嬉しい。」

「俺も梓に逢えて嬉しい。でもいつまでもつてわけじゃねえんだ。」

「え？」

「逢えるのは彼岸の間だけなんだ。また来年の彼岸になれば逢えるから悲しい顔すんな。」

と言って私の頭を撫でる。

「彼岸までの間、たくさん話できるね。隼人は何の話聞きたい？」

「龍馬の話。その話は耳にタコができるくらい聞いてたけど、聞けなくなったら寂しくてさ・・・。」

「わかった。薩長同盟の話するね。」

私は幕末が好きで、幕末の志士の中では龍馬が1番好き。

自分の知識を忘れないように隼人に龍馬の話をしてたけど、隼人はうつとうしがってあんまり聞いてくれなかったけど、そんな風に思ってくれて嬉しかった。

「最終的には薩長同盟を実現できたのは中岡慎太郎と龍馬の頑張りのおかげなんだ。学校の教科書には龍馬1人で同盟を結ばせた感じになってるけど本当は2人なんだよ。中岡さんと龍馬が協力しな

かつたら薩長同盟もなかったんじゃないかって思ってる。」

「あー。やっと終わった。薩長同盟が実現するまで本当に長いよな。んでも、そんな長い過程を覚えてる梓もすごいよなー。俺、ぜってー無理。」

そんな話をしばらくしていた時、

「おっと。もう時間か。」

「え、時間？」

「お前と逢える時間は決まってるんだよ。じゃ、また。」

「うん。バイバイ。」

そして私は夢から覚める。私の視界に入ったのはいつも見慣れている天井だった。

「やっぱ、夢か。でもいい夢だった。隼人に逢えるなんて。」

思い続けた結果か。夢で逢えただけでも幸せ。

私は夢で逢えたのが嬉しすぎて泣いてしまった。

お昼になりまた、会社の屋上で昼食をとっていた。

すると後ろから声がした声の主は凌平だった。

「なんかいつもより表情だ明るいね。なんか良い事でもあったの。」

「えへへ。夢でね、隼人に逢えたの。やっと願いが叶ったんだ。」

「心の底から笑う梓、久しぶりに見た気がする。よかったね、梓」

「でもね、彼岸の間しか逢えないんだって。」

「彼岸の間か・・・。あと6日だね。」

「まだ6日もある。隼人とたくさんお話できる。」

そして6日間私はなにを話すか考えていた。

第3章 夢（後書き）

最後まで見ていただきありがとうございます。

実は、私自身歴史が好きです。好きなのは、龍馬・新撰組（土方さん）・高杉さんなどです。歴史好きになったきっかけは司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』を読んだ事からです。読む本がなく図書館に借りに行つて手に取ったのがこの『竜馬がゆく』。こうゆうのって運命なのかなと思っています。龍馬伝きっかけで福山雅治「さん大好きです」。

第4章 別れまでのカウントダウン

第4章 別れまでのカウントダウン

今日も喜びを胸に眠りに就いた。

すると案の定、彼岸花畑の中に隼人の姿があった。

「よう。梓。」

「よう！隼人。なんかご機嫌だね。」

「ああ。だって梓に逢えるのが嬉しいから。死んでからこんな嬉しい事はねえよ。」

「私も嬉しいよ？隼人に逢えて。ねえ、隼人。」

「うん？」

「何の話聞きたい？私はなんでもいいよ。」

「じゃあ、昔話でもすつか？高校ぐらいの時の。」

「いいね。じゃ、隼人と初めて会った時の話でもしようかな。」
「？」

「隼人の第一印象はちよつと怖かった。」

「えっ！？」

「だって席隣だったけど目合っただけで睨むから。でも話していく内に隼人は優しくていい人なんだって気付いた。」

「そんな風に思ってたんだな。」

「うん。だから隼人の事好きになっただよ。」

「そつか。なんか照れるな。じゃ、俺も梓の第一印象を。」

「え？何？」

「梓の第一印象はびくびくして臆病な女だなんて思った。」

「え。なんか酷くない？」

「でもずつと接している内にずつと守りたい存在になってた。」

「ありがとう。やっぱり隼人の事好きになって良かったな。」

「俺も梓の事好きになって良かった。もうこんな時間だ。じゃあなまた明日。」

「うん。また明日。バイバイ。」

そして私は夢から覚める。

「夢だったけど、隼人に好きになって良かったって言われたから嬉しいな。」

そんな事を思いながら会社へ行った。

私はいつものように屋上で昼食を食べる為、普段昼食を食べる場所に行くと、その場所にはもう先客がいた。よく見ると凌平だった。

「あれ？何でここにいるの？」

「いいじゃん。別に。今日はここで食べたい気分だったから。」

と言って私も食べれるように左へずってくれた。

「ありがとうございます。じゃ、隣失礼します。」

と言って私は凌平の隣に座り、昼食を食べ始めた。しばらく沈黙が続いたが、その沈黙は凌平よって破された。

「あの日以来本当に表情が明るくなったよね。今日は一段と表情明るいし。」

「だって、隼人に毎日逢えるし、好きになって良かったって言われたから。」

嬉しそうに話す私の横で、凌平が悲しげな笑顔を浮かべていた事は知る由も無かった。

第4章 別れまでのカウントダウン（後書き）

最後まで見てくだっさってありがとうございました。
いつも短くて、駄文ですみません・・・。

第5章 凌平の気持ち

第5章 凌平の気持ち

ねえ、梓・・・僕の気持ちわかる？

そんな笑顔で恋敵の世話さないでよ。

彼が死んで悲しい事はわかるけど、

彼はもうこの世にはいないんだよ。

今僕ね、梓に彼岸花の花言葉教えなかったらなって思ってる。

だったら僕がこんなに苦しまなくていいのに・・・。

僕はどうしたらいいと思う？梓・・・

また昨日見た夢について梓と話をしている。やっぱりこの話をしている時の梓は笑顔だ。でも彼岸は終わりに近づいてる。彼岸が終わったら梓は以前のような梓に戻ってしまうのだろうか。梓が明るくなったのは彼のおかげか。何時になったら梓は僕の事を彼以上に思ってくれるのかな・・・。

いつそ僕の気持ちを伝えてみようか。でもそれはとても勇気がいる事。だって幼馴染の関係が壊れてしまいそうで怖いから。でも彼岸が終わって、彼に逢う事ができなくなった梓を支えられるのは僕だけだから・・・。

告白しようかな梓に。勇気を出して。今ならできる気がした。

僕は意を決して梓に話しかけた。

「梓、話があるんだけど聞いてくれる？」

「え？何？」

「僕ね・・・。」

「うん。」

「ぼくね、梓の事が好きなんだ。ずっと前から、ずっと想ってきた。」

「え・・・？」

そうだよね、そりゃ驚くよね。幼馴染からこんな事言われて。

「凌平の事はね、とつても仲がいい幼馴染って思ってた。だから凌平が私の事、そう思っているなんて知らなかった。ごめんね。凌平・・。」

「梓が謝ることないよ。びつくりしたでしょ。ただの幼馴染と思っ
ていた奴にいきなり前から好きだったなんて言われたから。」

「うん・・。」

「だから今度から僕の事、幼馴染としてじゃなくて1人の男として
見てくれないかな？梓の事守れる男になるから。絶対梓の前からい
なくならないから。」

「うん・・。」

「返事は梓が返せるタイミングでいいから。」
と言つて僕は梓の前から立ち去った。

幼馴染の関係、これで壊れたかな。梓は今までみたいに笑顔で話を
してくれなくなるかもしれない。

それでもいいと思った。

だって「好き」という気持ち、梓にわかってほしかった気持ちを伝
える事ができたのだから。

第5章 凌平の気持ち（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

第6章 枯れゆく彼岸花

凌平にいきなりあんな事を言われた。

- 僕ね、梓の事が好きなんだ。ずっと前からずっと想ってきた。それに、

- だから今度から僕の事、幼馴染としてじゃなくて1人の男として見てくれないかな？梓の事守れる男になるから。絶対梓の前からいなくならないから。

とも言われた。

急にあんな事言われ驚いた。凌平が言うように凌平の事はただの幼馴染としか思っていなかった。私の事を好いてくれている人がこんな近くにいるなんて知らなかった。

これからどう接していけばいいのか私は悩んでいた。

「返事は梓が返せるタイミングでいい。か・・・。」

どんな顔で会えばいいのかな。絶対凌平の事を意識して今までみたいにはならないと思う。

今までと一緒に幼馴染じゃ、ダメなのかな？

そう考えていると、幼馴染という今までの関係が崩れてしまいそうな気がした。

その夜、そんな事を考えていて眠る事ができなかった。

今日も変わらず屋上で昼食を食べていた。するとやっぱり凌平がやってきた。何時しか私の昼休みは「凌平と一緒にあの夢の話をしながら一緒に昼食を摂る」というものになっていた。何を話せばいいか、どんな顔をすればいいか悩んでいると、凌平が私の目の前に来てこう聞いた。

「梓昨日寝れた？」

「なんで？」

びつくりした。なぜ昨日の夜眠れなかった事を知っているのかと。

「だって梓の目の下、クマができてるから。」

同僚にも上司にも何も言われなかったが、鏡を見てみると少しクマができていた。自分でも気づかなかったのに凌平は、小さな変化にでも気づいていた。それは凌平が私の事をよく見ている事なのかなと思うと顔が熱かった。

「え？わ、本当だ。凌平すごいね。自分でも気づかなかったのに。ありがとう。」

と頑張つて笑顔を作りながら言った。すると凌平が、

「やっぱり僕と顔合わせするの辛いでしょ。だってあんな事言ったんだから。」

と私の頭に大きな手を置きながら言った。

「うん……。」

私は頷く事しかできなかった。

「そつえば。」

と凌平は何か思い出したように言った。

「え？」

「そつえばあと2日で彼岸が終わる。」

その事實は私を苦しめた。あと2日しか隼人に逢えない。もうあの幸せな夢は、あと2日しか見れない。そう思うと自然に涙がでけた。わかつているけど信じたくない事實だった。

帰る途中私は彼岸花を見つけた。でもそれはもうすぐ彼岸が終わることを物語るように枯れかけていた。その事で私は彼岸が終わるのかと改めて思った。彼岸が終わってもずっと隼人に逢いたいという願いは一生叶えられないんだろうとも思った

第6章 枯れゆく彼岸花（後書き）

最後まで見てくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4152x/>

彼岸花の花言葉

2011年11月13日23時08分発行